少年の主張審査会より

～かけがえのないもの～

少年の主張審査会より

6月9日(日)に少年の主張審査会が行われました。子どもたちの生の声を聞く機会としてとても充実した会になりました。今回は、中学生の最優秀作品である川瀬詩乃さんの主張「かけがえのないもの」から人権との関わりについて考えたいと思います。

中学生の部　最優秀作品「かけがえのないもの」

東部中学校　川瀬　詩乃

ピアノのレッスンの帰り、いつもの時間になっても母の迎えが来ず、妹と歩いて帰る事にしました。その道中、事故があったのか、車が水路に落ち、つぶれている様子が目に飛びこんできました。あのつぶれていた車は、母の車ではないかと頭が真っ白になり、急に不安が私と妹を襲ってくる感覚を、今でも鮮明に覚えています。徒歩での帰宅後、駐車場に母の車はなく、あの事故は母の身に起きたものだと分かった瞬間、我慢していた感情があふれ出し、涙が止まらなくなりました。母の状況を聞くと、ドクターヘリで運ばれ、意識不明の重体。そう聞いた瞬間、嘘だと思い、信じることができませんでした。それと同時に、「もっと母を大切にし、感謝の気持ちを伝えておけば良かった」と後悔しました。(略)

当たり前に思ってきた生活は、決して当たり前ではなく、今こうして生活できている事にも感謝する必要があると実感しました。それと同時に、「命」の大切さにも気づかされました。当たり前だと思っている日常に、当たり前にいる大切な人、大切な時間、大切な命は、ある日突然、当たり前では無くなってしまうこともあります。

今日と同じように明日が来る保証など、ありません。大切な人と過ごす時間や関わりが、かけがえのないものだと、母の事故を通して、身をもって気づかされました。

母は退院後、今まで通りの生活が送れると思っていたけれど、実際はそうではありませんでした。後遺症が残り、事故前に比べると体調が悪い日が増えた母を一番近くで見ていた私は、自然と母の体を気遣い、自分から動くようになりました。幼い頃、自分さえよければいいと思っていた私とは裏腹に、後遺症を背負う母を助けていきたい。恩返しできるようにしていきたいと思うようになりました。しかし、慣れない事を行うのは簡単ではなく、投げ出したくなる日もあります。そんな時、いつも思い出すのは、母が入院中に度々聞いていた父の「家族はチーム。ピンチな時ほど助け合おう」という言葉でした。(略)

だからこそ、みなさんに今一番伝えたいことがあります。当たり前など、ありません。大切なものを失ってから気が付くのでは遅いのです。今の生活に感謝し、困った時に寄り添ってくれるかけがえのない人、今というかけがえのない時間を大切に。それが私の願いです。

かけがえのないもの

川瀬さんの主張からどんなことを感じたでしょうか。"身近にいる"から、"当たり前になっている"からこそ、かけがえのないものが気付き難いものになってしまっているのかもしれません。そこに着目し、まっすぐに気持ちを表現している川瀬さんの主張は、はっと大切なものに気付かせてくれます。そして、川瀬さんの主張はもう一つ大切なことを伝えてくれていると感じます。それは、つらく、投げ出したくなりそうな時にいつも思い出されるお父さんの言葉です。この言葉に込められたお父さんの想い。「川瀬さんからお母さんだけでなく、お父さんからお母さん、お父さんから川瀬さんへと家族のつながりが大切だ」というお父さんの想いを感じ取っているからこそ、かけがえのないものに目を向け、大切にしたいと強く感じられているのだと思います。

自分に当てはめて考えてみると、私の周りにも私のことを大切に思ってくれる人がいます。そして、私を大切に思ってくれるその人にも、同じようにその人を大切に思っている人がいるのです。自分の周りにいる人には、そういうつながりがあると考えるとより一層、相手の人権を大切にしたいと考えることができます。人間関係が希薄になってきている現代。だからこそ、目の前にいる相手だけでなく、その相手の奥にあるつながりにまで目を向けて関わりが築けると素敵ですね。